

「お金よりも

言葉を遺す」ことの方が

大切です」

田園調布の生みの親。日本郵船や帝国ホテル、札幌麦酒など日本を代表する企業の創立に尽力。「日本実業界の父」渋沢栄一はまさにリアル・リッチ。だが子孫に美田を残さなかつた。

富は独占するより 永続することに 価値がある

米系の大手ヘッジファンドに勤めて、投資家のおカネをいかに上手く運用するかという仕事を、米国と日本で通算で5年間ほどやりました。

現在は資産運用のコンサルタントとして、複数のファンドを組み合わせて投資する米国のファンド・オブ・ファンズ（日本の日本における業務推進や国内の様々な運用会社の顧問等の仕事をしています）。

独立してから以前と比べて、考えに大きな変化が生まれました。マーケットとにらみ合っていた時代では、仕事の視点は短期的に大きく儲けることでし

た。毎日が勝負の激しい世界です。今はそこに、横の時間軸を入れてい

つまり10年、20年、あるいは30年後

の目線で収益を目指す世界に強い関

心を持つようになったのです。そう

なると自分の資産というより、次世代に

何を残そうかという話になります。富

を築くことを基に、その富を永続させ

るといふことです。

日本は、「ファンド資本主義」と呼

ばれる時代に突入しました。これは、

投資家から託されたおカネをいかに

効率的・合理的に運用するかというこ

とです。簡単にいえば、いかに価格を

より高く、時

間をより短く

して、成果を

出すかということです。

この投資の視点は、とても重要なこ

とです。しかし、それが全てではあり

ません。合理的に富を作ることができ

たとしても、それが必ずしも、「富の

永続」にはつながらないかもしれな

からです。

私に生じたこの変化は、ひとつは、

子供ができたこと、つまり次世代の

ことを考え始めたことがきっかけで

す。もうひとつは、私の祖父の祖父、

つまり4代前の祖先にあたる渋沢栄

一の影響です。6年前に独立した私は、

会社を起すにあたって、父が所有し

ていた何十冊もの渋沢栄一の伝記や

資料を読むことになりました。

「500社も会社を立ち上げた人だ

渋沢健

シブサワ・アンド・カンパニー代表取締役

profile.....しぶざわ・けん

'61年、神奈川県生まれ。渋沢栄一の5代目の子孫。UCLA経営大学院を修了、MBAを取得。JPモルガン、ゴールドマン・サックス、大手ヘッジファンドのムーア・キャピタル・マネジメントなどの外資系金融機関を経て、'01年、投資コンサルティング会社のシブサワ・アンド・カンパニーを設立した。他に渋沢栄一記念財団理事、経済同友会幹事などを務める



から、何か役に立つことが書いてあるだろう」

と、初めて渋沢栄一本人が残した言葉に目を通しました。

そんな軽い気持ちで始めたのですが、途中から夢中になりました。「渋沢栄一の言葉」は、現代の日本に通用する普遍的なメッセージであることに気づいたからです。その「言葉」を少し紹介しましょう。

「富というものはうまくできていて、それを独り占めしようとするに永続しない」

（しかし、大勢の大衆の一人一人の富

の永続性を構築できれば、一つ一つの事業、そして地域社会や国の発展につながる」

渋沢栄一が大切にしていたのは「永続」でした。つまり、今で言うサステイナビリティです。富を築くことを否定はしません。でも、「永続」の方がもっと大変で大切なことを自覚していました。そして、そのために必要なのは、中国の古典「論語」などに基づく道徳的な価値観であると説いたのです。

「日本資本主義の父」と呼ばれた渋沢栄一は、明治維新後の日本を「民営化」

によって活性化、世界の列強に伍していける存在にしようとした。政府の力だけに頼ることなく、各地に拡散している「民力」を集めてインフラを整備、産業を次々に起こしていったのです。

なぜ「論語と算盤」なのか

その第一歩が、日本初の銀行となった第一国立銀行です。明治維新で大蔵

官僚となった渋沢

栄一は、米国の「ナ

ショナル・バンク」

を真似て、紙幣の兌換性を高めるために、銀行の設立を立案します。ところが、その直後、財政問題で内閣と対立、大蔵省を退職したために、初代総監(頭取)のポストが立案者の渋沢栄一に回ってきたのです。明治6年(1873年)、33歳の若さでした。

国の条例で成立したので「国立」の名がつけましたが、資本金は民間が出資しています。第一国立銀行の場合、大株主が三井組と小野組で各100万円を出資。渋沢栄一はその他



小学校2年生のときに銀行員である父親の転勤に伴い渡米。そのまま米国で過ごし、'83年にテキサス大学卒業

44万円のなかの4万円を出したのですが、両大株主が主導権を求めて牽制、それが経営権の空白を生み、ここに渋沢栄一の「据わりの良さ」もあって、以降、44年間も頭取を務める結果となったのです。

銀行頭取であると同時に、日本のベンチャーキャピタリストの元祖でもある渋沢栄一は、500社もの設

立に関与しています。なかにはすぐに解散するような企業もありましたが、王子製紙、東京海上保険、日本郵船、東京電力、東京瓦斯、東京石川島造船所、清水建設、日本興業銀行、横浜正金銀行、日本鉄道会社など、その後の日本経済

の礎となるような企業を数多く残しています。

財界活動の先駆者でもあり、東京商工会議所の創立に関わり、東京証券取引所の創立委員であると同時に、一橋大学、早稲田大学、日本女子大学、日本赤十字社、聖路加国際病院などの設立にも尽力しました。

こうして、近代資本主義に必要なインフラを「民力」によってすべて整えた渋沢栄一は、「富を築きたい」という人間の欲望を肯定した人です。そうであれば市場は成り立たず、経済社会は活性化しません。

しかしながら、「利益の追求」に血道をあげたことを肯定する人ではありませんでした。彼の有名な「論語と算盤」という教えに、それは集約されています。「論語」に象徴される道徳的な価値観と、「算盤」という言葉に込められた富を生み出す計算を、うまく融合させなければ「永続」はないのです。

「企業の社会的責任」が一般に認識されたのは21世紀に入ってからのこと

ですが、100年以上も前に渋沢栄一はその概念を理解していたといえます。

16分の1の血と叡智を残してくれた

人が望む「富の永続」に貢献したいと考えている私は、長い時間軸で企業と対話できるファンドの創設を考えています。想定しているのは個人投資家であり、プロの機関投資家ではありません。

個人は生活者であり、その生活者の知恵の集積が、「長い目で企業を応援する」というスタンスで、企業を成長させる。そして、投資家に長期的なリターンをお返しするという考えです。私にとって渋沢栄一は、16分の1の血を与えてくれた祖先のひとりであり、かありません。また彼は、三井、三菱と並ぶような財閥を築けたのかもしれませんが、結局、子孫に美田は残していません。

ですが、渋沢栄一は現代の日本に通用する数々の言葉を遺してくれました。明治の大実業家である彼の言葉に説得力と含蓄があり、メッセージ性が高いのは事実ですが、私は誰もが子孫に向かって、あるいは後世の人々に、自分の言葉を遺すべきだと思っと思っています。

「富」は女にもおカネだけではありません。その人間に叡智が備わっていれば、叡智もまた貴重な「富」として「永続」させるべきだと思っております。